

編集後記

新型コロナウイルスの緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が解除され、多くの活動が再開されてきていますが、コロナは本当に重大な影響と多くの課題を社会に突きつけました。コロナが収束しても、もはや全てが元に戻るとことは考えられないでしょう。コロナ以前から、「働き方改革」が望まれ、また、デジタル技術の進歩に伴い、デジタルテクノロジーを駆使して、経営や事業の在り方、生活や働き方を変革する「デジタルトランスフォーメーション（DX）」が求められ、そうした動きが進んでいました。

「新型コロナ」は、これらに一気に拍車をかけ、好むと好まざるとにかかわらず、例えば、世の中にはリモート〇〇やオンライン〇〇が溢れるようになっていきます。本号でご紹介した第5回小豆試験研究情報交換会もリモート方式ですし、本誌の編集会議もオンラインミーティング方式です。オンライン会議でも、Zoom、Teams等いろいろな方法があり、最低限のITリテラシーも必要で、最初のうちは慣れない操作に戸惑いました。つながらない、見えない、聞こえない、切れるなどトラブルも多かったのですが、ようやく何とか少しずつ慣れてきました。直接会ってFace to Faceでの会話や議論、コミュニケーションは今もとても大事だと感じますが、オンライン方式は世界中どこからでも手軽に参加できる、移動時間ロスを無くせるなどのメリットもあります。あるセミナーでも、リアルに会場に集まっていたいた時よりも、むしろ参加者数は大幅に増加しました。会うのが困難な遠く離れた友人らの間等で、オンライン飲み会なるものにも何度か挑戦しました。声は聞こえても画面の大きさの制約から画面上で一度に顔を見られる人数には限りがありますが、これはこれで楽しむことができました。コロナでやむなくではなく、遠方の仲間同士が気軽にコミュニケーションをとれるという意味で、これはこれでアリかもなと思いました。

農作物自体は土地から離れることは不可能ですが、栽培管理や機械操作等リモートやオンラインの活用が進んできています。農業経営でもオンラインの活用機会は、ますます増えていくでしょう。DXは単にオンラインといったものに留まらない広範なもので、政府もデジタル庁を新設し、デジタル社会の構築に力を入れ、農林水産省でも今年3月「農業DX構想」が取りまとめられています。私も、生活やプライベートを含めて、もっとデジタル技術をうまく使いこなしていければよいのだがと今も日々奮闘中です。皆様はいかがでしょう。（大島 潔）

発行

公益財団法人 日本豆類協会
〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13
三会堂ビル4F TEL：03-5570-0071
FAX：03-5570-0074

豆類時報
No. 105

2021年12月15日発行

編集

公益財団法人 日本特産農産物協会
〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13
三会堂ビル3F TEL：03-3584-6845
FAX：03-3584-1757
